



介護予防体操教室に参加



日本の高齢者対策の理解・介護保険制度についてのセミナーを自主的に実施したりしています。地区コミュニティ協議会支援のプログラムでは、まちづくりセンターに健康運動指導士を招いて中・高齢者を対象にゲーム感覚で楽しみながら健康運動をしつかりと行います。さらに、高齢者のみではなく、より若い年齢層から「健康運動」の習慣獲得をめざすためのプログラムとして、区役所健康福祉課主催の運動教室、そして疾病予防運動施設として認定された「ロコパーク」での運動プログラムの見学を実施しました。

パナマの若手研究者が
日本の包括的高齢者ケア学ぶ
新潟医療福祉大学では、2023年11月19日から25日まで、中米パナマの国立身体医学リハビリテーション研究所から、リハビリテーション医・理学療法士・作業療法士・栄養士の4名を招き、「さくらサイエンスプログラム」を実施しました。4名の方には、日本の包括的な高齢者ケアについて、本学での座学と医療・福祉現場の見学をおして理解を深めてもらいました。

パナマの高齢化率は日本の1970年代のそれであり、高齢化の波が押し寄せてくることは、一部の専門家にしか意識されていません。今回の新潟での体験は、タイムマシンで一気に数十年先のパナマを見たのと同じようなものだったため、訪問された一同には驚きの連続でした。

主なテーマは、①家族にまかされた高齢者ケアから、地域全体でサービスを提供する高齢者ケアへの転換②転ばぬ先の杖である介護保険③認知症のケアの3つで、最後にパナマでの高齢者ケアについて必要となるステップについて議論をしました。

パナマでも地域単位での集まりというものはありますが、親睦のためのゲームなどが主な活動で、「健康運動」という考え方は一般には普及していません。今回の見学訪問では「健康運動」を中心に据えたいいくつかのプログラムに参加しました。

高齢者介護予防体操教室では、その地域での活動のリーダーを中心として、皆で公民館に集まって軽運動をしたり、専門家をまじえての講話などのプログラムを自主的に実施したりしています。地区コミュニティ協議会支援のプログラムでは、まちづくりセンターに健康運動指導士を招いて中・高齢者を対象にゲーム感覚で楽しみながら健康運動をしつかりと行います。さらに、高齢者のみではなく、より若い年齢層から「健康運動」の習慣獲得をめざすためのプログラムとして、区役所健康福祉課主催の運動教室、そして疾病予防運動施設として認定された「ロコパーク」での運動プログラムの見学を実施しました。



久保 雅義
(新潟医療福祉大学
国際交流センター長)

新潟医療福祉大学の活動報告

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

II 特別連載 II

プログラムスケジュール	
11月19日	羽田着
11月20日	新潟移動 顔合わせミーティング、歓迎会
11月21日	講義「作業療法」 介護予防体操等見学
11月22日	講義「日本の福祉政策」 医療施設見学
11月23日	講義「看護学」「生活支援学」
11月24日	講義「栄養とリハビリ」 福祉施設見学
11月25日	総括、東京移動、羽田発



大学院生による研究活動のプレゼンテーション



認知症についての講義を受けた招へい者ら

パナマでは「年をとって身体が悪くなったら、家族にでもみてもらうさ」という意識が一般市民の間ではいまだに主流で、具体的な政策などもまだ検討されていません。現在の日本の高齢社会を支えている介護保険制度も2000年から、日本の高齢化が始まった1970年から30年後の実現です。高齢者に対し「病院で寝たきり」から「地域で面倒をみる」への方向に舵をきったのも1990年代後半です。

日本の現在の高齢者対策を理解するには、

その背景にある歴史から紐解いていく必要があります。今回のプログラムでは、現場の見学と対応する形で本学教授陣によるセミナーを実施しました。

65歳以上人口比率が30%に達しようとする長寿国日本で、次のチャレンジは65歳以上人口の5人に1人が認知症者になるという現実です。また、夫婦と子供からなる核家族世帯が30%以下、単身世帯が30%超という日本の事情では「家族で認知症者の面倒をみる」ということが事実上不可能になっています。この状態はパナマからみるとまさに「異国」そのものですが、いつか来る将来であることも確かです。大学での座学に加え、実際にグリープホームの見学も実施しました。

国立身体医学リハビリテーション研究所は、パナマでのリハビリテーション実践のリーダーであるとともに、研究施設としての役割を担っています。そこで、障害によって失われた運動機能の再学習・再獲得を促進する脳科学、関節の変性などの謎をさぐる関節病理学、関節の外科手術後のリハビリテーション、運動選手の膝や足首の怪我の予防をめざす応用運動学、リハビリテーション栄養、の研究活動についても見学を行いました。

国立身体医学リハビリテーション研究所はパナマ国内で唯一のリハビリテーションの臨床・研究のための国立の専門機関で、パナマの医療福祉の領域においては指導的役割を果たすことが期待されています。今後は、同研究所とのリハビリテーション専門領域での技術的交流・支援を企画していく予定です。

●プログラム終了後の後日談

「鉄は熱いうちに打て」の故事にならない、本学の国際交流企画として、プログラムでは送り出し側だったパナマのリハビリテーションセンター訪問を2024年3月に実施しました。さらにセンターからの紹介で、リハビリテーションの領域で強い関連があるパナマ大学医学部も訪問することができました。さくらサイエンスプログラムで持ち帰られた経験を現地にあう形で根付かせるためには、継続したコミュニケーションが必要です。キーパーソンを中心とする人的な絆の大切さをお互いに再認識することができました。

今後の交流拡大の軸として「研究活動の促進」が話題となり、まず手始めとして、センターで蓄積している身体運動計測データのなかから「研究の種」をさがすための分析が始まっています。スペイン語に興味のある学生を中心とした将来的な交流活動についても議論がなされました。英語圏に限らない国際交流活動は、本学のグローバル化の動きに大いに刺激になっています。